

2014年のサンマ漁場と海面水温場との関係

矢吹 崇(一般社団法人 漁業情報サービスセンター)

1. はじめに

2013年のサンマの水揚げは少なく、その原因として、北海道東方海域で低温であったことが指摘されている。サンマ漁場は海況の変化に対応して位置を変える。そのため、日々の水温を的確に捉えることが必要とされる。

漁業情報サービスセンター(以下、JAFIC)では、日曜日を除いて毎日水温情報を配信しており、サンマ漁業にも活用されている。また、漁場位置や市況なども独自に調査を行っており、総合的なサンマの情報が集積されている。

本発表では、2014年の日々の海面水温場とサンマ漁場位置のデータを用いて、本年の漁況の特徴を海面水温場の変化とあわせて紹介する。

2. データ

海面水温場として、JAFIC 日報水温を用いる。JAFIC 日報水温は NOAA 衛星赤外線水温、AMSR2 マイクロ波水温等の衛星水温画像に加えて、漁船等の船舶データやブイなどのデータをあわせたもので、JAFIC のスタッフが手作業で作成している。漁場データとして、JAFIC 収集の QRY 情報(漁船間無線連絡資料)を用いる。

3. 結果

2014年の開始時期は8月下旬と遅く、まとまった漁場ができた場所が46~48°Nで平年よりも北に位置していた(図1a)。このときの海況は46°N以北でおおむね14°C以下、45°N以北で15°C以下であり、漁場での水温は13~14°Cであった。サンマ漁場の指標となる15°C等温線が平年より北に位置していたため、漁場位置も北に位置していたと考えられる。漁場は9月上旬には44~46°Nに南下したものの、依然漁場位置は北よりであった。

9月中旬になると、漁場位置はおおむね45°N

以南となり、9月16日頃には根室半島の東方80~150 km付近に漁場が形成されるようになった(図1b)。このとき水温は45°C以南で親潮流軸付近を除くとおおむね16°C以上で、依然高温傾向にあった。親潮流軸付近では降温が顕著で、親潮第二分枝でも降温して16°C以下の水温域が拡大している。

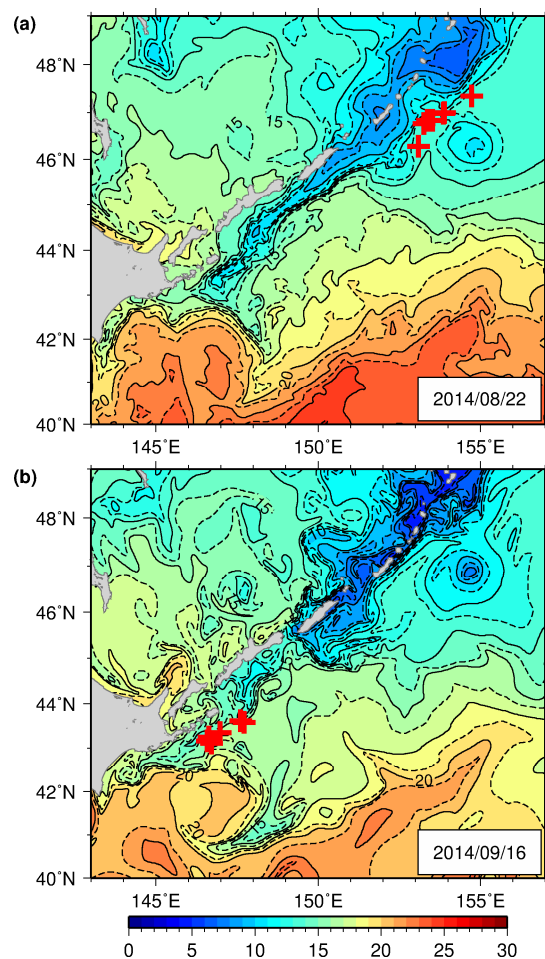


図1. 海面水温(単位:°C)と漁場位置(+). (a) 2014年8月22日、(b) 2014年9月16日、(c) 2014年9月23日、(d) 2014年10月22日、(e) 2014年11月17日。

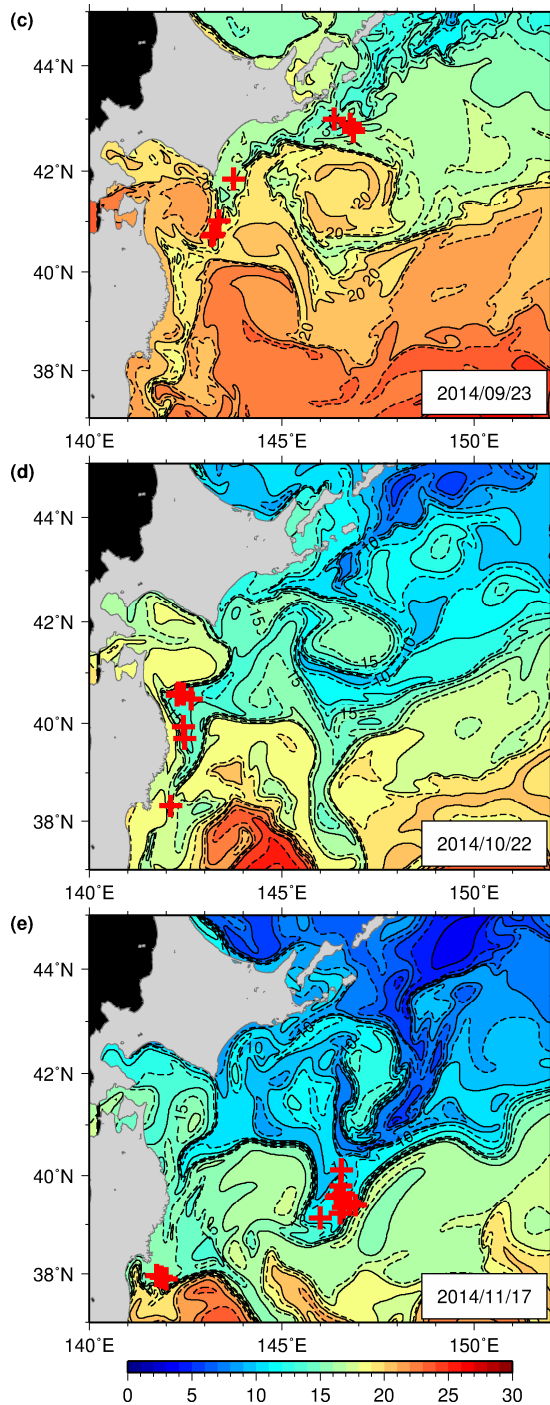


図 1. 続き

9月下旬になると北海道南方で漁場が形成された(図 1c)。このとき道東沖の親潮は、おおむね 17°C以下で、襟裳岬南 100 km 付近までこの 17°C 以下の水温域が続いている。このときにおいても北海道東方は高温傾向で、このことが親潮第一分枝に漁場が形成されやすい原因となった。

10月には道東沖と東北沖に漁場が形成されるようになった。10月下旬には道東沖の漁場形成が終了し、三陸海岸沖が漁場となった(図 1d)。このときの海況は青森県沖と岩手県沖の 2 つの暖水域が特徴で、その間の冷水域において漁場が形成されている。

11月には岩手沖への冷水の流入が弱まり、宮城沖と、岩手沖暖水域の北側や東側で漁が行われ、11月中旬以降は岩手県沖の暖水の東側で漁場が形成されている(図 1e)。11月中旬には親潮第二分枝から宮城沖への冷水の経路ができたため、宮城沖へも魚群が入っている。

4. まとめ

2014 年は北海道東方海域で高温傾向が著しかったため開始時期は遅く、開始期の漁場位置が北に遠かったが、漁期を通じての漁獲は 225 千トンで、昨年の 1.5 倍となりおおむね好況であった。10月に津軽暖水と岩手県東方の暖水の間でまともな漁場が形成されたことや、11月に親潮第二分枝から宮城沖への経路ができたことなどが好条件になったと考えられる。